○令和4年度海外派遣研修
「ドイツと日本の看護教員の養成方法の違いから、新人看護教員の離職を軽減する手段を考える」

看護学科　准教授　山海　千保子

○期　間　　令和4年8月27日～　9月3日（　8日間）　※　出発日，帰着日も含む。

○研修先　　ドイツ連邦共和国
　　ボーフム市，　ボーフム健康科学大学

1．研修の目的

本邦の看護基礎教育を担う看護教員は、全看護職の2.7％程[1)]であるが、新人看護教員の離職が高い[2)]と報告されている。また、本学で専任教員養成講習会を担当し3年目になるが、各学校からは「新人教員が辞めるのはなぜですか？」「やめないための対策は何かないか？」「教員不足で学生に十分時間を割けない」など、改善策を求められることが度々あった。そこで、ドイツの看護教育者への養成方法を聴き、本邦との違いから離職者数を軽減する方法を考察することを目的とする。

2．研修の概要

〈研修場所の概要〉

ドイツ連邦共和国、ノルトライン・ヴェストレン州、ボーフム市に設置された、ボーフム健康科学大学（hsg Bochum・Hochschule für Gesundheit：以下、HS Gesundheit とする）は、ドイツで唯一の医療系4年生大学であり、Department of Nursing Scienceと、作業療法・理学療法・助産・言語聴覚療法などを担うDepartment of Applied Health Sciences、地域医療に特化したDepertment of Community Healthがあり、看護学科と理学療法学科では修士課程も併設している。HS Gesundheitと本学は、令和3年6月23日に医療と健康の分野での国際交流の促進と、共通の研究プロジェクトを立ち上げることを目的とし、同年から交流を図ってきた大学である。

〈 HS Gesundheitにおける看護教員養成の概要〉
看護教員を養成する制度やカリキュラムについて（Markus Wübbeler教授より）

ドイツでは、看護師免許取得者の大多数が主に病院附属の職業専門学校（3年制）を卒業しており、4年制大学を卒業した看護師が少ない。また、看護師養成所の98％は看護専門学校である。7～8年前より、看護教員になるためには大学院で修士号を取得しないと教育できないシステムに変更されており、HS Gesundheitでは、看護学科の修士課程で看護教員の養成も行っている。

看護教員を養成するシステムは基本的に2種類あり、専門学校を卒業した看護師の場合は3年間、大学時代に教育について学んでいた看護師の場合は2年間と期間が異なっている。修士課程では看護論や看護方法論、看護研究などの講義や演習の他に、看護専門学校でインターシップとして4～6か月の間に200時間を使い、授業準備と実施を繰り返し行っており、終了後はすぐ仕事に適応できているようである。

看護専門学校におけるインターシップ中、大学院生は3，4人の大学院担当の教授がスーパーバイズとフィードバックを担当し、看護専門学校の教員は、授業準備を一緒に行い、授業の評価も行っている。授業準備では日々試行錯誤をしながら、大学院生が「授業を実施する」経験を重視した指導を行っている。

〈ドイツの看護教員に関するその他の情報〉

- 臨床経験7年目ぐらいでキャリアアップや、教員になるため大学院に入る人がいる。80％が女性である。
- ドイツでは修士号をもたないと看護専門学校で教えることはできなくなった。現在は修士号をもっている人と、もっていない人が混在しているが、特に混乱はない。
- 9月より大学院に進学する看護師は、専門学校卒業のため、これから約3年間在籍し、研究テーマは、シミュレーション教育によって、看護学生に臨床的に起こりえる様々な状況を想定した対応について学ぶためにはどうしたら良いか、であった。また、本学と共同研究する意欲もあり、今後交流をしていく予定である。

3．まとめ

看護教員の養成期間はドイツが2～3年、本邦は半年～1年という違いがあった。ドイツでは、インターシップの際、就職後に必要なスキルは何度も繰り返し実施し、自信をもって仕事を始めることができ、授業でも臨機応変に対応できるまで成長していることが考えられた。1年間の講習会では、授業の実施は1回であるため、講習会

を修了した後も、ドイツのおけるインターシップのように、職場と本学が連携をもち新人看護教員のフォローをしていくことが必要だと考えた。

参考文献

1）日本看護協会：日本看護協会調査研究報告〈No.98〉2022,　2021年　看護職員実態調査，（オンライン）
https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/98.pdf，（2023.3.2）

2）佐藤道子，石塚純子：看護教師の「辞めたい思い・ゆきづまり感」に関する調査．看護教育，51（11），946，2010.